

# アーカイブズ資料の創造的活用について考える——作品制作を実例に

ミズタニタマミ（多摩美術大学彫刻学科研究室助手）

多摩美術大学八王子キャンパスの中庭に設置されているリチャード・セラの作品《To Encircle Base Plate Hexagram, Right Angles Inverted》（以下《To Encircle》）についてリサーチしたことで経験した一連の出来事を振り返ることでアーカイブズ構築の困難とアーカイブズが創造的に活用されることへの希望について記す。

## セラ作品よ、Youはなぜ多摩美に？

中庭の端、食堂とコンビニエンスストアのある建物の傍に、全く目立たない様子でそれ、《To Encircle》は存在している。厚み1.5cm弱の鉄の板で、直径約3mの円形が形作られ、アスファルトの地面に埋められたその彫刻作品は、全体像がどうなっているのか、地面の下にはどれだけの深さが存在しているのか、地平面に現れているその外見だけでは全くわからない。その鉄の彫刻作品はその断面部分を地面と一体化させており、「多摩美にリチャード・セラの作品があるらしいがどこにあるのだ？」とわざわざ気にして探してみなければ見過ごしてしまうような、そのような作品だ。あまりに目立たないので、物資運搬のトラックがその「作品の上」に駐車していることすらある。作品というよりは環境の一部として存在している、そのような種類の作品である。

ところで多摩美八王子構内にはセラの作品だけではなく、屋外彫刻作品が方々に点在している。正門にある関根伸夫《空相》（2004）、東門の長澤英俊《TINDARI》（2007）、アートテーク前の若林奮《振動尺 傾斜の中の手》（1978）などをはじめとして、全部で12作家による13点もの屋外彫刻作品が存在している。セラ作品を除いてそれらは全て、かつて多摩美で教鞭をとっていた諸先生方の作品である。それらはおそらく大学と各作家との関係性において寄贈された作品なのであろう。推測でしか

書けない理由は、作品設置の経緯に関して大学として持っている資料が何もなく<sup>1</sup>、作家本人に聞く以外に設置の経緯を確認する手段がどうやらないようであるからである。

これらは多摩美にゆかりのある日本人作家の作品ばかりである。そのような中であって、ただ一つ、何のゆかりもなさそうな国際的彫刻家リチャード・セラの作品がある、というのは何とも不思議だ。他の12点の作品は威容を誇り、モニュメンタルであり、いかにも屋外彫刻作品らしい。しかしセラの作品は地面と一体化し、目立たず、真逆のベクトルで存在しているように見える。

多摩美構内の屋外彫刻作品としては不可思議に存在するこの作品について調べてみようと思うのは自然だった。はじめに関連資料として、次の2点を見出した。ひとつは『中原佑介美術批評選集』〈第5巻〉「人間と物質」展の射程」（現代企画室、2011）、もうひとつは『多摩美術大学研究紀要』第17号（2002）の上崎千・荻島綾「To Encircle Base Plate Hexagram, Right Angles Inverted-多摩美術大学構内に設置されたりチャード・セラの彫刻に関する考察」だ。

これら2点の資料から、以下のことが明らかになった。《To Encircle》は、1970年の第10回「日本国際美術展（東京ビエンナーレ）人間と物質」展のために制作発表された作品であり、当時の東京都美術館と上野公園の間の敷地地面に設置された作品であった。美術展が終わりしばらくすると、公園整備事業で作品は掘り起こされ、その「鉄の輪」は野晒しにされた。それを知った当時の多摩美の大学院生が、上野から「鉄の輪」を回収。世田谷区の上野毛キャンパスへ移設し再設置した。次に2000年ごろに何らかの理由で八王子キャンパスに移設、再・再設置されるに至った。

1 諸作品の設置は4期にわたる八王子キャンパス整備計画に伴って2000年代に順次行われている。作家選定、作品設置の経緯は公開されていない。

最初に作品が掘り出され、上野公園で捨て置かれていた状況は、『美術手帖』1978年6月号（34頁）で報じられている。学生はこの記事をきっかけに、「作品」が野晒しで放置されていることを知った。この経緯の当事者であったらしい人物による、移設の経緯の詳細を記すブログが存在している。実のところ、インターネットでこの作品を検索すると、真っ先に出てくる情報はこのブログであった。時系列で事細かに書かれたその文章からは、嘘偽りのない事実のレポートであるらしい生々しさと確かさが伝わってくる。しかしながら匿名でなおかつブログというごく個人的な媒体において書かれたそれは、参考程度に読むことはできても、公式な記録であるとはいえない<sup>2</sup>。ここに書かれた話が本当であるならば、なぜ公式な場においてどこにも記録が残っていないのか。この思いが、この調査中ずっと私についてまわることになった。

### アーカイブズの困難1：隠れた当事者が隠れる諸事情

上崎氏の論考は、『To Encircle』に関する公式なドキュメンテーションとして、極めて充実した資料であると断言できる。彫刻の「垂直性」「水平性」という視座からの議論、『To Encircle』に続いて作られたセラの関連作品との比較、彫刻単体の物質＝オブジェクトではなく、設置状況や設置行為を含んだ「彫刻的プログラム」という観点からの作品理解、『To Encircle Base Plate Hexagram, Right Angles Inverted』というタイトルそのものから読み解かれる言語論的検討など多岐にわたる論点から、この作品を深く掘り下げている。また『To Encircle』に言及のある関連文献として、29点もの出版物がリストアップされている。非常に細やかで丁寧な論考だ。しかしながらある面では、何を根拠にその主張が可能であるのか不明瞭な、気になる言説も含まれていた。それは2000年の八王子への再・再設置は、大学権威の横暴であると指摘し、するどく批判した点である。八王

子に設置された作品は、リチャード・セラというオーソリティを「半ば盗用というかたち」で扱っているに過ぎず、作品移設の大学側の動機に、「疑念」を持たざるを得ないということを、論考の〔補遺〕において上崎氏は明記している<sup>3</sup>。

幸い、国立新美術館の伊村靖子氏を介して上崎氏とオンラインで話を伺う機会を得られた。そこでこの論考について、色々な質問・疑問を投げかけることができた。20年以上も前の著作物についてしつこく質問されるなどというのは上崎氏にしてみれば青天の霹靂の感もあったことであろう。しかしながら氏は細かな質問にも疎まらず丁寧に解答してくれた。伊村氏も交え、2時間近く話しをしていく中で、上崎氏こそが当時、多摩美の職員として八王子の移設の現場に立ち会った当事者であることが分かった。その事実を知ったことで、何を根拠にこの意見を書くことができたのか、という私の疑問は氷解した。

論考を一読しただけでは上崎氏が八王子移設に立ち会ったことは知るよしも無い。論考の性質上、それはわざわざ明記する必要のない事柄ではあるし、書かずとも論じることができることはたくさんある。また、紀要発行当時であれば書かずともその界限では周知のことであつたであろうから、多摩美関係者は上崎氏がなぜこのような意見を提示しているのかが理解できたであろう。

上崎氏は、セラの望んでいない作品タイトルを刻んだ銘板をつくるために<sup>4</sup>、作品名の邦題の下訳をすることや、設置業者への指示監督など、当時の多摩美芸術学科教授陣から指示されていたようだ。

自らの専門性において到底正当であるとは思えない事柄に、業務上、それを止めることも糺すこともできずに、ただただ遂行する立場として携わってしまったときに、その人物が抱く感情とはどのようなものであろうか。推して知るべしである。当事者が自らすすんで公表することがないとすれば、こうした事情があつたことをここに

2 色々な線を辿った結果、誰がそれを書いたのかを特定できた。その人物は、この件について本名登録のSNS上でも、なかなかの長文で繰り返し意見を書いている。しかしながら、この記事はハンドルネームで発表されている以上、匿名で書かれたものとして扱わざるを得ない。

3 『多摩美術大学研究』紀要第17号2002年.p172,173

4 「セラは「作品」であることを表記しないように要望した」『中原佑介美術批評選集』〈第5巻〉「人間と物質」展の射程」p.133。

記しておく必要がある。このような不都合な真実は、公式のドキュメンテーションには現れず、直接の会話からやっと引き出される種類のものである。

せめてもの抵抗であったのかどうかかわからないが、上崎氏は工事業者の設置模様を映像に記録していたそうだった。しかしながら、芸術学科に保管されていたはずのこの映像記録を見つけ出すすべはない。筆者が芸術学科の職員にでもなって、あらゆる倉庫をあさったりできない限りは……。そうしたところで何も出てこない可能性もかなり高い。

八王子への作品移設の決定プロセスやそこに携わった教授陣などに対して、一当事者としてリアルタイムで経緯をみてきた上崎氏は、この蛮行を批判する論考を書いた。真相を知ってしまえばごく当然でシンプルな話だ。しかし残された資料からだけではそれはわからなかった。さらに言えば、この件の真相を明らかにできるアクセス可能な資料は学内に残されていない。担当者がいなくなったとたん、資料も所在不明となった。セラのような作家を研究対象とする大学という組織でさえ、結局のところこうした資料、事実の管理は「人」に依存しているということだ。資料が資料としてアーカイブズ化されるには当然属人的でなく、組織的に整理管理されるべきだが、それはなされていなかった。

## アーカイブズの困難2：それぞれの「俺の」セラ。公開の回避はデリカシーか私物化か。

本件の調査で学内各所にあたるうちに、油画科教授の木嶋正吾氏が、上野毛キャンパス移設・設置時の当事者であるらしいことがわかった<sup>5</sup>。早速本人にメールをして面会をお願いし、快諾を得た。

木嶋氏の話から、上野毛移設時も学生たち自身が、その様子を映像記録に収めていたことがわかった。この映像記録を保持しているのは氏の友人であり同級生で、現在九州在住の某氏であった。映像をぜひとも見たいとお願いすると、木嶋氏はその場で友人に電話してくださった。DVDを多摩美へ送って貸し出してくれることに

なった。DVDは油画研究室内であれば閲覧できるということになった。

それにしても、このような貴重な記録が個人の所有物としてしまわれているうちは、やがて消失したり忘れ去られたりする運命を免れないのではなかろうか。しかしながら木嶋氏との話の中で感じたことは、当事者たちにとって上野毛への移設の一連の出来事が、個々人にとってパーソナルで大切な思い出であるということだ。元々の作品には公共性があっても、この再設置の経緯にはすべからず私的な思い入れが切り離せずに組み込まれている。

当時の学生は、上野公園から「鉄の輪」を運び出すにあたり、公園管理局から持ち主本人の許可を得ることを求められた。かくしてレオ・キャステリ画廊を介してリチャード・セラ宛の手紙を書くのであるが、それに対してセラからは直筆で極めて友好的な返信が届いているのである。この手紙を受けとった当時の学生たちの気持ちの高揚たるや、想像に難くない。上野毛移設時の記録映像の冒頭で、この手紙の「Thank you」というセラ直筆の文字が、ゆっくりと大写しにされるカットがあることは象徴的だ。上崎氏の論考によれば、この手紙のコピーが芸術学科にあるとのことだったが、現在その所在は不明である。

セラとの私的なやり取り、そして仲間同士で苦勞を共にし、重い「鉄の輪」を運び出して溶接して再設置した一連の出来事には身体性を伴った、深い感情的な経験があったことであろう。先の匿名ブログによれば、運び出す際に輪を半分に切断したとされている。記録映像にはそれを溶接している様子が映されている。接合部付近がボルトで補強されているのも見えたが、それが元々あったものなのか、学生の手によるものなのかまでは映像ではわからなかった。彼らはセラ作品再設置のために、上野毛の地面をツルハシやらスコップやらで、苦勞して掘り込んで、掘り込んでいた。映像からは、かなり掘り込まないと作品が設置できなかった様子が伺われた。一度掘った場所に作品を置いてみるも、掘った穴にはまらず、

5 木嶋氏は2023年度に退任。上野毛移設時の学生は、現在定年を迎える世代であることは念頭においておこう。

何度も掘り直す場面が映っている。余談だが、ビデオのバッテリーあるいは記録容量を気にしてか、途中何度か電源を落とす場面があったのは時代を思わせる。

こうして、再設置当事者たちによるパーソナルでエピソードに富んだ経験と、経験に連れ立った思い入れが、上野毛校での作品の存在条件に不可欠なものとして付与されたのだった。

付与と書いてしまったが、これは関わった人間の口伝で語り継がれる種類の、言ってしまうえば内輪的語りであり、何からオースライズされていないという意味では不確かな「存在条件」ではある。時間が経てば、そこにセラの作品が存在しているということだけが事実として必要十分で、なぜそこにあるのかという経緯についてはさほど関心が払われなくなっていく現在のように……。

オースライズされず、内輪的なままであることにはコインの裏表のような両面の意味がある。すなわち大学権威は関係なく自分たちの出来事であるという、何にも揺るがされないパーソナルな思い出としての強さと、パーソナルで公にドキュメントされていないがゆえに蔑ろにもされやすい脆弱さである。このようなデリケートさの上で、関係者は当時の思い出を大切に心にしまっている。そのような印象を受けた。

持ち主は、その記録映像をむやみに公開したくないと思っている、という趣旨のことを木嶋氏より伝え聞いた。面会が2023年7月で、送付は9月であったことから、この気分を察したい。その状況や心情を穏当に解説するならば以上のような意味合いのことであつたろう。

当事者が公開に慎重になる心情はまだしも、さらにややこしいのは、その情報を追いかけている研究者が得た情報や資料を、我が物として秘匿する傾向である。自分の成果として公式に研究発表するまでは大事にしまっておきたいというならばまだわかるが、しまいっぱなしでどうやら発表する気もない様子も遠目に目撃した。どのような心理で秘匿するのか、その心情を確かめるすべもないが、このような事例は決して珍しいことではないようだ。



「DX時代のメディア表現」展で《Tamami is going to encircle "To Encircle" in Tamabi.》は、受付でのパフォーマンスとして展示された。撮影：ミズタニタマリ

その後、映像を見せていただいたお礼を木嶋氏にメールする際、「関係者の心情はわかるが、どこにも公開される手段がないままであるのは惜しい」という趣旨のことを書き送ったところ、「DVDはすでにアートアーカイブセンターに納められているそうです」というご返事があった。

そこで、アートアーカイブセンターにこの映像資料について問い合わせた。すると「所蔵しておりません。課内で確認しましたが誰も心当たりがない」という返事が返ってきた。

これをどう解釈するかについては今のところ筆者の理解を記すことは控えておく。これを読んだあなたは何を推測するだろうか。